

共産集團の明確な態度表示とその実践が先行されねばならないということであります。

したがって北韓共産集團は、武装ゲリラを侵入させるなどの、すべての戦争挑発行為を即刻中止し、いわゆる『武力による赤化統一または暴力革命による大韓民国の転覆をくわだててきた従来』の態度を完全に放棄する』ということを明白に内外に宣言し、これを行動で実証しなければなりません。

こうしたわれわれの要求を北韓共産集團が受け入れ、実践していることを、われわれがはっきり認めることができ、国連によって明白に確認されるばあいには、私は人道的見地と統一基盤造成に寄与するのみか、南北韓の間に立ちだかつている人為的障壁を、段階的に取り除きうる、画期的でより現実的な方案を提示する用意があることを明らかに次第であります。

また、北韓共産集團が韓国の民主、統一、独立と平和のための国連の努力を認め、国連の權威と権能を受諾するならば、国連で韓国問題討議に彼らが出席することも、あえて反対しないつもりであります。

こうした私の構想に、もう一つつけ加えたいのは、北韓共産集團に対し『もうこれ以上、罪のない北韓同胞の民生を犠牲にして戦争準備に狂奔する罪悪行為をせずに、より善意の競争、つまり民主主義と共産独裁のうちのどの体制が国民の暮らしをよりよくするか、または、よりよく暮らしうる条件を備えている社会であるかを立証する、開発と創造の競争に乗り出す用意はないのか』を聞きたいということであります。

親愛なる国内外同胞のみなさん！

であります。われわれの当面課題である自立経済と自主国防を達成することも民族の団結であり、民族の念願である国土統一を達成することもわれわれの団結された力であります。

国民のみなさん！  
二五年前の八・一五に謳歌した、その感激と歓喜を、今後必ず成就される祖国統一のその日に、より力強く謳いうるよう、こぞつて団結して前進しましょう。

＊『朴正熙大統領演説文選集——平和統一の大道』ソウル、大統領秘書室、一九七六年、一四—二二ページ

## 一九七二（昭和四七）

### 60 南北共同声明（七月四日）

最近、平壤とソウルで、南北関係を改善し、分断された祖国を統一する問題を協議するための会談が開かれた。

ソウルの李厚洛中央情報部長が一九七二年五月二日から五月五日まで平壤を訪問して平壤の金英柱組織指導部長と会談、金英柱部長を代理して朴成哲第二副首相が一九七二年五月二日から六月一日までソウルを訪問して李厚洛部長と会談した。

この会談で双方は、祖国の平和統一を一日でも早く実現しなければならぬという共通の念願に基づいて虚心坦懐に意見を交換し、たがいに理解を増進させるうえで大きな成果をあげた。

今年、わが国が初めて世界に門戸を開放した一九世紀後半の開化期から、ほぼ百年になる年であります。それから一世紀、わが民族は落後と隷属、戦乱が折り重なった受難の道を歩んできました。しかし、わが民族はこうした試練をよく耐え抜き、いまや、われわれの前には、新しい中興の夜明けがほのぼのと近づいております。これはまさに、中興の最後の機会だといっても過言ではありません。

もう一つわれわれが記憶しておくべきことは、今日から始まる四半世紀が過ぎれば、今世紀の末期になるということであります。西暦二〇〇〇年ごろの世界と、そのなかで大韓民国が位置する座標がいずれにあるかということを、正確に予言しうる人はおりません。

しかし、少なくともこのときのわが国は、

——国土統一を成就してすでに久しい強力な民族国家として、  
——全国民がひとしく繁栄を謳歌しうる豊饒な先進福祉国家として、

——世界史の主流に堂々と参加し、寄与しうる誇りに満ちた姿に変容していなければなりません。

いまは着実なその準備期間であります。  
一九七〇年代はこのように、過去と未来を結びつける、われわれの近代民族史の道程において、民族中興の成否を分ける重要な位置を占めている時期であります。また、この年代の中興事業を成就しうるかどうかは、われわれの力をどれだけ『生産的』な目標に集中させることができるかにかかっております。

民族の団結、力の集中これはまさに中興の成否を左右する關鍵

この過程を通じて、双方は、長い間の断絶の結果として生じた南北間、誤解と不信を解消し、緊張の高潮を緩和させ、さらには祖国、統一を促進させるため、つぎのような諸問題について完全な、意見の一致をみた。

一、双方は、つぎのような祖国統一原則に合意した。

第一、統一は、外勢に依存したり外勢の干渉を受けることなく、自主的に解決しなければならない。

第二、統一は、たがいに相手側に反対する武力行使によらず、平和的方法で実現しなければならない。

第三、思想と理念、制度の相違を超越して、まず同一民族として民族的大団結を図らなければならない。

二、双方は、南北間の緊張状態を緩和し、信頼の雰囲気造成するため、たがいに相手側を中傷、誹謗せず、大小を問わず武装挑発をせず、不意の軍事的衝突事件を防止するための積極的な措置を取ることに合意した。

三、双方は断絶していた民族的連繫を回復し、たがいに理解を増進させ、自主的平和統一を促進させるため、南北間で多角的な諸般の交流を実施することに合意した。

四、双方は、現在全民族の大きな期待の中で進められている南北赤十字会談が一日も早く成功するよう、積極的に協力することに合意した。

五、双方は、突発的軍事事故を防止し、南北間で提起される諸問題を直接、迅速かつ正確に処理するため、ソウルと平壤間に常設直通電話を引くことに合意した。

六、双方は、このような合意事項を推進するとともに、南北間の諸問題を改善、解決し、また合意した祖国統一原則に基づいて国の統一問題を解決する目的で、李厚洛部長と金英柱部長を共同委員長とする南北調節委員会を構成、運営することに合意した。

七、双方は、以上の合意事項が、祖国統一を一日千秋の思いで渴望している全民族の一致した念願に符合すると確信しながら、この合意事項を誠実に履行することを全民族に厳粛に約束する。それぞれ上部の意を体して

李 厚 洛  
金 英 柱

\*『韓国外交四〇年』ソウル、外務部、一九九〇年、四一三ページ

# 一九七三（昭和四八）

61 朴正熙大統領「平和統一外交政策に関する特別声明」（六月二三日）

親愛なる五千万同胞のみなさん！

私は本日、われわれがこれまで推進して来た南北対話の経験と国際情勢の推移にてらして、民族の宿願である祖国統一の与件を実質的に改善するための、われわれの平和統一外交政策を内外に

宣明するものであります。第二次世界大戦後、わが国は解放されましたが、われわれの意思とはうらはらに国土は断断され民族は分裂を余儀なくされました。

当初、日本軍の降服を受けるための軍事的境界線といっていた三八度線は、いつの間にか鉄のカーテンと化し、南と北は政治、経済、社会、文化などすべての分野において、完全に遮断されてしまいました。

それまでに、米・ソ共同委員会が開催され、三八度線の解消と統一民主政府樹立のための交渉が行なわれたのですが、米・ソ間の根本的な対立により交渉は失敗に帰し、結局、韓国問題は国際連合に持ち込まれました。

一九四七年、第二回国連総会は南北韓を通じた自由総選挙の実施を決議し、臨時韓国委員会を派遣しました。ところが、北韓の拒否にあい、南韓だけで自由選挙が行なわれ、一九四八年八月十五日、大韓民国政府が樹立され国連によって唯一の合法政府として承認されたのであります。一九五〇年六月二十五日、北韓共産軍の不意の侵略によって韓国動乱が勃発、数多い同胞が生命を失い、全国土は焦土と化し、三年間の戦乱の末ようやく休戦は成立したものの、分断は継続され、統一は遼遠なものとなりました。

私は、この分断による同族の苦痛を解消し、平和統一の基盤を築くため、一九七〇年「八・一五宣言」を通じて、南北間の緊張緩和を呼びかけました。そして、翌年の八月一二日、わが方は南北赤十字会談を提案し、さらに昨年七月四日には、平和統一のための南北共同声明を発表するに至ったのであります。

こうして南北対話は始まりました。しかし、満二年近い今日に

われわれは客観的な現実に対して、能動的に対処していかなければなりません。われわれは、祖国統一を国内外の現実の中で実現する、賢明かつ確固たる方策を樹立し、これを粘り強く追求していかなければなりません。それはほかでもありません。現実を直視し、平和をこの地に定着させ、それに基づいて、われわれの自主力量で統一を是非達成しようということであり、われわれの自主力量こそで私は、つぎのような政策をここに宣言するものであります。

- 一、祖国の平和的統一がわが民族の至上課業である。われわれはこれを成就するためのあらゆる努力を継続して傾注する。
- 二、韓半島の平和は是非とも維持されなければならず、南北韓は互いに内政を干渉せず、侵略をしてはならない。
- 三、われわれは、南北共同声明の精神に立脚した南北対話の具体的成果をあげるため、誠実と忍耐をもって継続して努力する。
- 四、われわれは、緊張緩和と国際協力の役に立つなら、北韓がわれわれと共に国際機構に参加するのに反対しない。
- 五、国際連合の多数会員国の意思であれば、統一に障害とならないという前提のもとに、われわれは北韓とともに国際連合に加入することに反対しない。われわれは、国際連合加入以前であつても、大韓民国代表が参席する国連総会における「韓国問題」討議に、北韓側が同時招請されるのに反対しない。
- 六、大韓民国は、互恵平等の原則のもと、すべての国家に門戸を開放するものであり、われわれと理念や体制を異にする諸

至るまで、われわれがあげ得た成果は、あまりにもわたくしたちの期待とはかけ離れたものであったといわざるをえません。われわれは、容易で実践可能な問題から一つ一つ解決していくことにより、南北間の障壁を漸次取り除き、具体的な実績を通じて相互間の不信を信頼に置き代えていくことこそ、対話を生産的に運営する道であり、平和統一を実現する近道であると主張してきました。ところが北韓側は、不信の要素は残しておいたまま、大韓民国の安全保障を危うくする軍事及び政治問題の一括先決だけを主張しています。その一方で北韓側は、統一のための南北対話の進行と併行して、対外的には事実上祖国の分断を固定させる行動を続けてきました。

こうした南北関係の現状から見ても、われわれの期待している南北対話の結実を得るまでには、今後とも数かずの難関が予想され、かなり長い期間がかかるものと判断されるのであります。しかも、このような状態が放置されるならば、結果的には不信が深まり緊張が高まる憂慮すらなくはありません。

一方、最近の国際情勢は、第二次世界大戦後の冷戦時代が終わり、現状維持を基調とする列強の勢力均衡のうえに立って平和共存を維持しようとするのが、基本的潮流といえるのであります。また、これまでのこの地域における一連の周辺情勢の発展にみても、国土統一が近い将来成就できるとは見られません。こうした国際情勢は、わが民族史に一つの大きな問題を提起しております。即ち、祖国統一という民族最大の念願と目標を、国際情勢の現実の中でどう追求するかという問題なのであります。親愛なる五千万同胞のみなさん！